平成６年度村道拡幅工事に伴う発掘調査報告書②

中越遺跡

（なかこし）

長野県上伊那郡宮田村

1995

宮田村遺跡調査会

序

昭和31年、宮田村における初めての学術調査が実施されて以来、昭和59年まで14次にわたる発掘調査をしてきた中越遺跡では、昭和62年から、西原土地区画整理事業の進行にあわせて調査を実施し、さらに下水道工事や個人住宅が建設される部分についても、発掘調査をし記録保存をはかってきました。本書は、平成６年度に実施した、中央グランド北の道路から北へ延びる村道625号線の拡幅改良工事に伴う発掘調査の記録です。

調査によって縄文時代前期の住居址４軒、竪穴１基と数基のピットが発見されましたが、うち２軒の住居址は、平成３年度に下水道工事と工場拡張工事に伴う調査で一部を発掘してあったもので、今回の調査によって、当時推定されていたことの幾つかについての確証を得ることができました。また、ピット群の発見も、縄文前期の集落構造を解明する一つの手がかりといえましょう。

道路の拡幅部分を調査するということで、当初様々な困難が予想されましたが、幸い、地元の皆さんと工事関係者の御理解と御協力により、初期の目的を果たすことができました。それらの皆さんと、狭い現場で苦労された宮田村遺跡調査会会長友野良一先生をはじめとする、作業にあたられた方々に感謝申し上げ、刊行の言葉とする次第であります。

平成７年３月15日

宮田村教育委員会

教育長　小林　　守

例　言

1．本書は、平成６年度に実施した、村道625号線拡幅改良工事に伴う中越遺跡の発掘調査報告書（その２）である。

2．調査は、宮田村長の委託をうけ、宮田村遺跡調査会が実施した。

3．年度内に刊行しなければならない必要もあって、報告書の内容は、資料を示すことに重点をおいてある。

4．報告書中の遺構実測図や拓影図の縮小率は次のようにしてある。

遺構全体図……1/120　　住居址……1/80

縄文土器拓影図……1/3

5．本調査にかかわる記録や図面類、出土遺物は、宮田村教育委員会が保管している。

目　次

序

例　言

Ⅰ　遺跡の概観と調査の経過……1

1　遺跡の立地……1

2　調査の経過……3

(1)　調査にいたるまで……3

(2)　調査の組織……3

(3)　調査の経過……4

(4)　遺物の分類について……4

Ⅱ　縄文前期の遺構と遺物……5

1　住居址……5

(1)　177号住居址　(2)　188号住居址　(3)　282号住居址　(4)　283号住居址

2　竪　穴……11

3　ピット……12

Ⅲ　ま と め……12

Ⅰ　遺跡の概観と調査の経過

1　遺跡の立地

中越遺跡は、天竜川右岸に発達した太田切扇状地の、北側の扇側部に位置し、扇端である天竜川河岸から遺跡の中心部までは、約１kmを測る。この扇状地面は、小河川によって放射状に開析され、いくつかの長峰状の台地の連なりとなっており、遺跡の位置は、大沢川と小田切川の間の台地上の、大沢川がその侵食面を明確にし始める地点でもある（図１）。

大沢川と小田切川の間に形成された台地の上面は、両河川の侵食等によって、様々な変化をみせているのだが、遺跡付近では、台地南縁に部分的に形成された低位面と、北の広い高燥面とで構成されており、後者はさらに、やや低い南側と、高い北側に分けることができる。

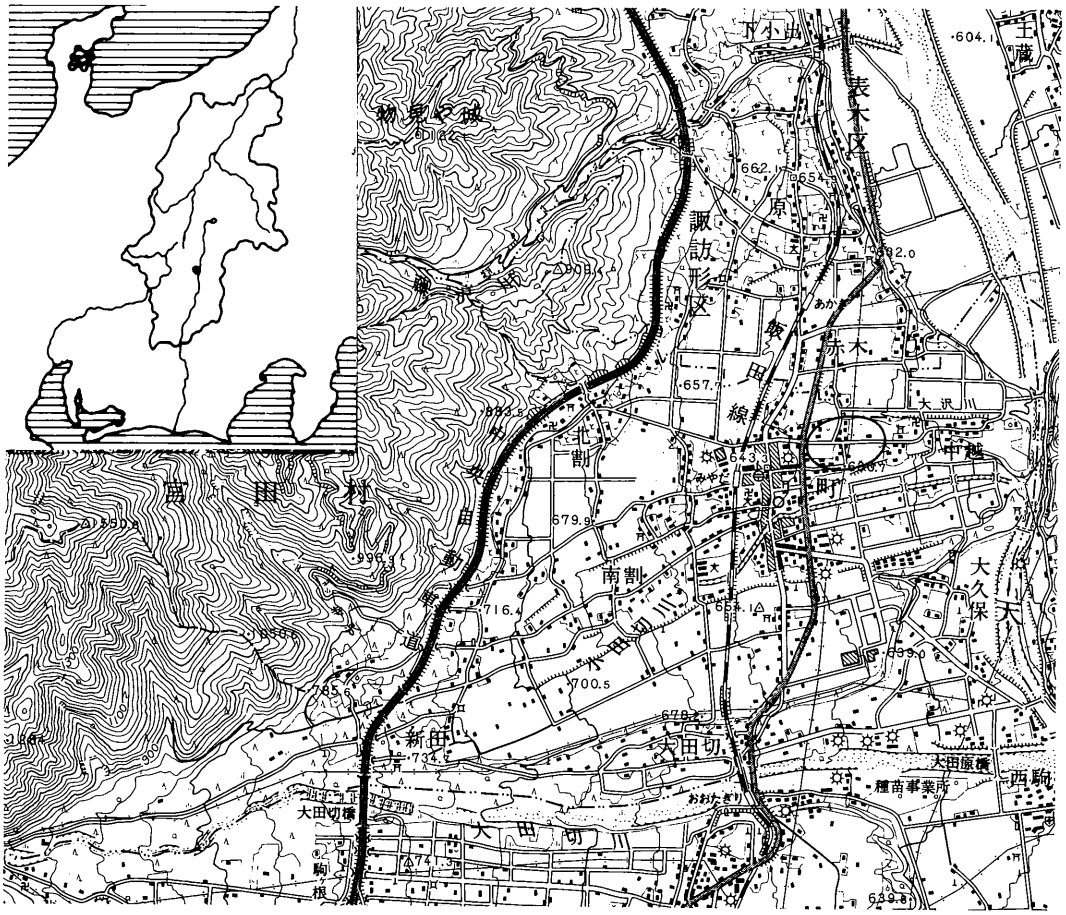


図１　位置図（５万分の１）

遺跡の範囲の台地上は、現在は東へゆるく傾斜する平坦面となっているが、今日までの発掘調査で、東流するいくつかの小さな流れや溝が確認されており、腐埴土層の厚さが極端に薄い地点などもあることから、当初は、もう少し起伏に富んだ地形であったと想定されるが、急速な宅地化が進んでいる現在、そのような微地形は地上では見ることができなくなりつつある。遺跡一帯で少し前まで、石積みを設けて畑を平坦に整地した痕が所々に見られており、現地形は、かなり整地された後の姿なのである。

調査地点は台地北縁の一段高い面に相当し、遺跡中央を東西に縦断する中越北線から、遺跡西端近くで北へ向かって伸びる道路部分で、過去の調査で、一帯は北東方向にゆるく傾斜する広い平坦面であったことがわかっている。

遺跡付近の表土あるいは耕作土の下は、黒褐色土、褐色土、黄褐色土、を経て黄色土に移行するのが一般的であり、腐埴土の深い地点では、黒褐色土の上に黒色土が存在し、浅い地点では、黒褐色土、次いで褐色土が欠けるかごく薄い。黄色土の下には、太田切扇状地を構成する拳大から人頭大、さらにはひとかかえもある巨大な礫が存在しているのだが、腐埴土の浅い地点では、それらの礫が表土下に顔を出している所もある。

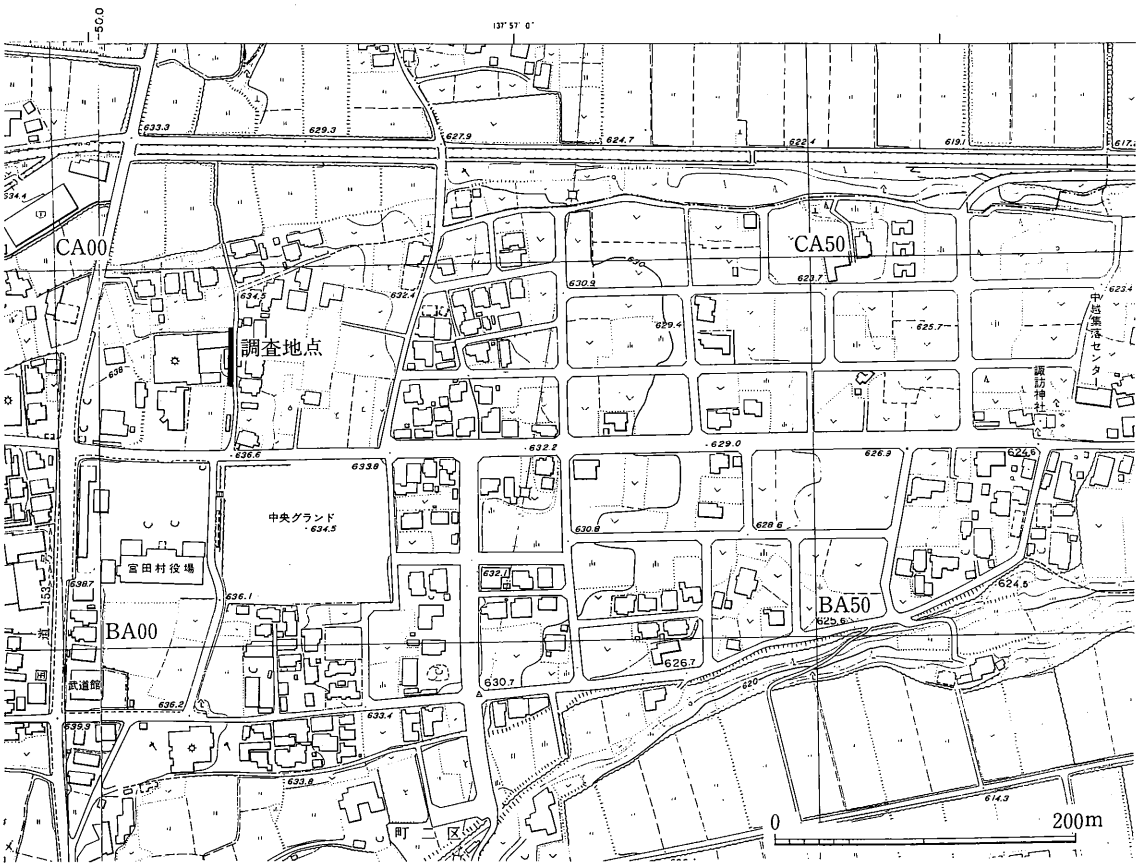


図２　調査地点図（「宮田村平面図」―平成元年12月作成―をもとに作図）

中越遺跡には、高燥な台地北縁に展開する縄文時代前期の集落と台地南縁に連なる縄文時代中期の集落、南の低位面に位置する縄文後期の墓域と考えられる集礫遺構までが含まれており、結果としてその規模は、約24haと広大なものとなっている。今回の調査地点はそのうちの縄文前期の集落の中心に近い位置ということになる。

2　調査の経過

(1)　調査にいたるまで

本報告の調査は、東西に広い遺跡の西寄り、中央を東西に縦断する道路から北へと入っていく村道625号線の拡幅改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された。村道625号線は、平成３年度に下水道工事に伴う調査が実施され、今回拡幅改良工事される部分も、同じ年に２箇所が調査されており、今回の工事に伴って調査したのは残っていた２箇所の拡幅部分に限った。本書はその２箇所のうちのほぼ中央部の調査記録である(図２)。遺構等が断片的に残っている既設の道路下は、結果として下水道部分しか調査できなかったわけで、何回も掘り返される道路での工事に、どのように対処していったらいいか、今後の課題を残してしまった。工事に伴う発掘届は５月19日に提出されている。

当初、平成６年の６月から７月を発掘時期と考えていたのだが、西原土地区画整理事業に伴う調査が９月まで長引き、本工事の着工が秋になるとのことから、引き続いて都市計画道路拡幅工事に伴う調査を先行させ、本報告の調査に入ったのは、10月であった。

(2)　調査の組織

今回の遺跡調査にかかわる組織と、現場の発掘調査に参加され、実際の作業をして頂いた作業員の皆さんは次のとおりである。

◇宮田村遺跡調査会

会　長	友野　良一
委　員	片桐　貞治（９月まで）
〃	平沢　和雄
〃	青木　三男
〃	伊東　醇一
〃	唐木　哲郎
〃	加藤　勝美
〃	太田　　保（10月から）
教育長	小林　　守

◇宮田村教育委員会

教育次長	小林　　修
係　　長	原　　寿
係	小池　　孝

◇調査参加者

小田切守正
松下　末春
木下　道子
酒井　艶子
林　美弥子

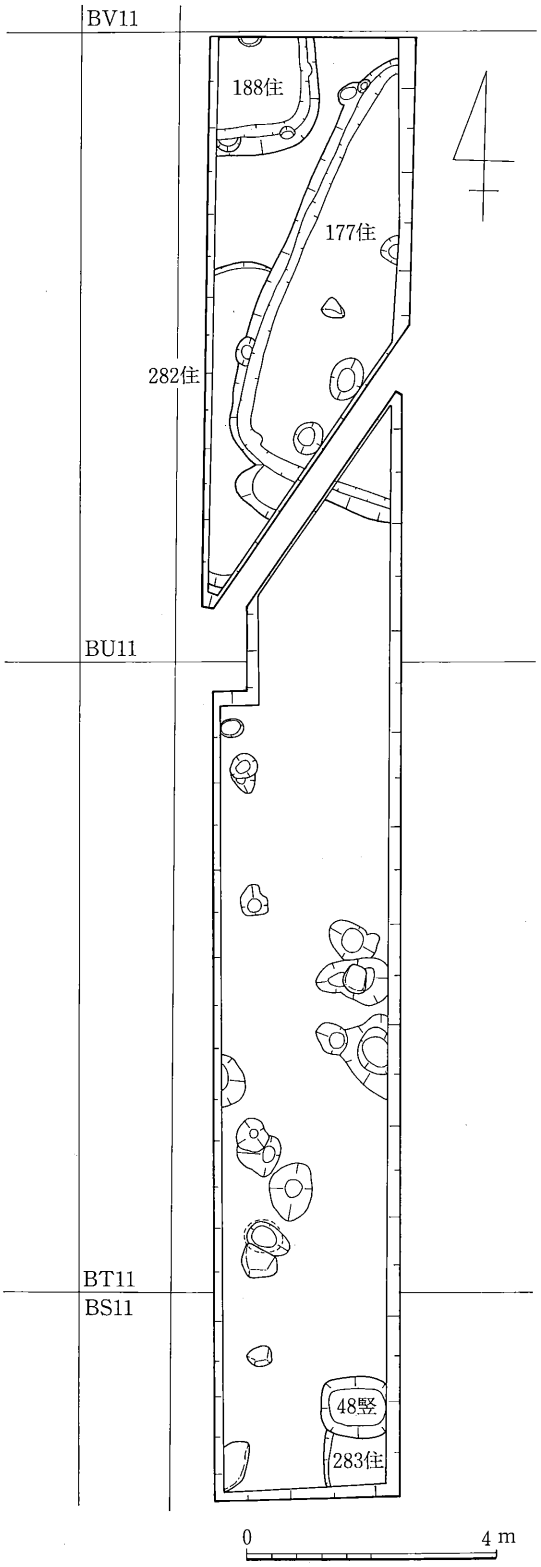


図３　遺構全体図

(3)　調査の経過

現場における発掘作業と遺物水洗作業は、平成６年10月７日から10月26日まで実施した。北端の狭い地点の調査に引き続いて実施したもので、発掘は、用地内に掘り上げた土を置かざるを得なかったことから調査予定地を適宜３分割し、北から順次掘る方法で進めた。その結果、北端に下水道工事に伴う調査で一部調査されていた177号住居址と工場拡張工事に伴う調査で同様に調査されていた188号住居址の一部が発見され、新たに282号住居址を検出した。その南からは幾つかのピットが発見されたが、有意な群別はできなかった。最後に南端に住居址１軒と竪穴１基を発見して調査は終了した。遺構が続いており、調査地の南と北をより拡張して調査したかったのだが、北側は西に接する工場への上水道が施設され、南側は工場入口で掘り返すことができなかったため、調査してない。調査面積は約130m²。調査地点を遺跡地に設定されているグリッドで表わすと、ＢＳ～Ｕの11列グリッド（図２、３）ということになる。

整理作業は12月から開始したが、作業は今年度実施した西原土地区画整理事業に伴う第14次調査の整理と並行して行なった。

(4)　遺物の分類について

出土した縄文前期の遺物の分類は、土器石器共「中越遺跡発掘調査報告書」（宮田村教育委員会1990）での基準と呼称をそのまま使用している。詳細は上記報告書を見ていただきたいが、Ⅰ期は中越期に、Ⅱ期は神ノ木期に相当し、Ⅰ群とは在地、Ⅱ群は関東系、Ⅲ群は東海系の土器をそれぞれ指している。遺跡

地には昭和53年に10m方眼のグリッドが設定されており、今回もそのメッシュを使ったが、地区の呼称は、グリッド設定当時のものでなく前記報告書によった。

II　縄文前期の遺構と遺物

1　住居址

(1)　177号住居址

ＢＵ－11グリッドに検出されたが、西の一部を調査しただけである。平成３年の下水道の調査では、下水道埋設部分が過去の消火栓埋設工事で掘り返された部分と重なっていたため、存在を確認した程度だった。282号住居址を切っている。平面形は推定だが、軸線を北北東方向に置く、長辺７ｍ以上の長方形としておきたい(図４)。この時期としては大型の住居址である。検出面からの深さは35cmを測る。床面は粘土質黄色土によって貼られ、壁下を幅の広い周溝が全周している。柱穴はP_1が相当し、あるいはP_2もそうであるかもしれない。壁からかなり内に入った位置ということになる。P_3はこの住居址よりも古く、西壁に穿たれたP_5とP_6が上屋に関係したものである可能性もあろう。南壁の、本址の床と同じ深さのピットがこの住居址に付属する施設なのか否かは確定できなかった。

遺物は多い。土器（図５、６、７）はII期Ｉ群が７割を占め、Ｉ期Ｉ群が約３割、II期を主体とするII群とIII群が小量づつ出土している。２本の付加条（図６－９～14)、束（図７－１～５）などが目につく。石器には石鏃13、石匙５、スクレパー４、石錐３、打製石錘２のほか、打剝痕のある硬砂岩類の円礫５・棒状礫１、粗大剝片状のもの５、黒曜石類の剝片87・屑片47・石核40・両極打法の痕跡あるもの７・原石４と、滑石製垂飾品１が出土している。

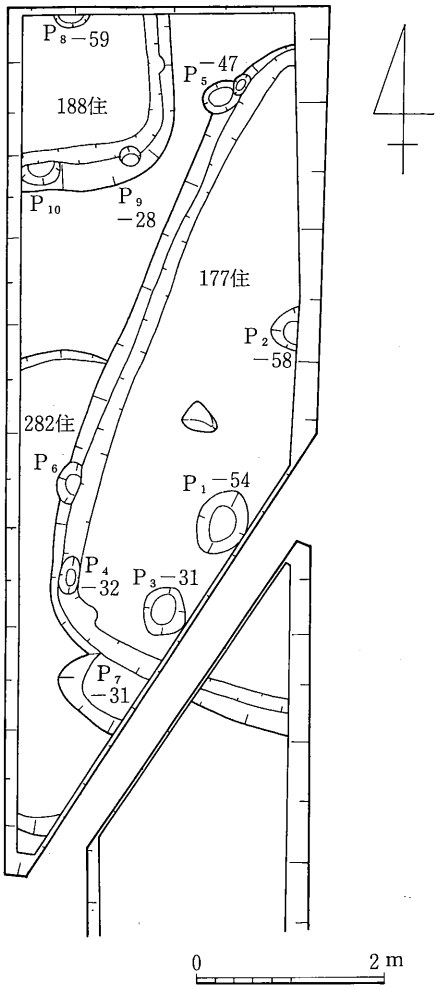


図４　177・188・282号住居址実測図

177号住居址(1)

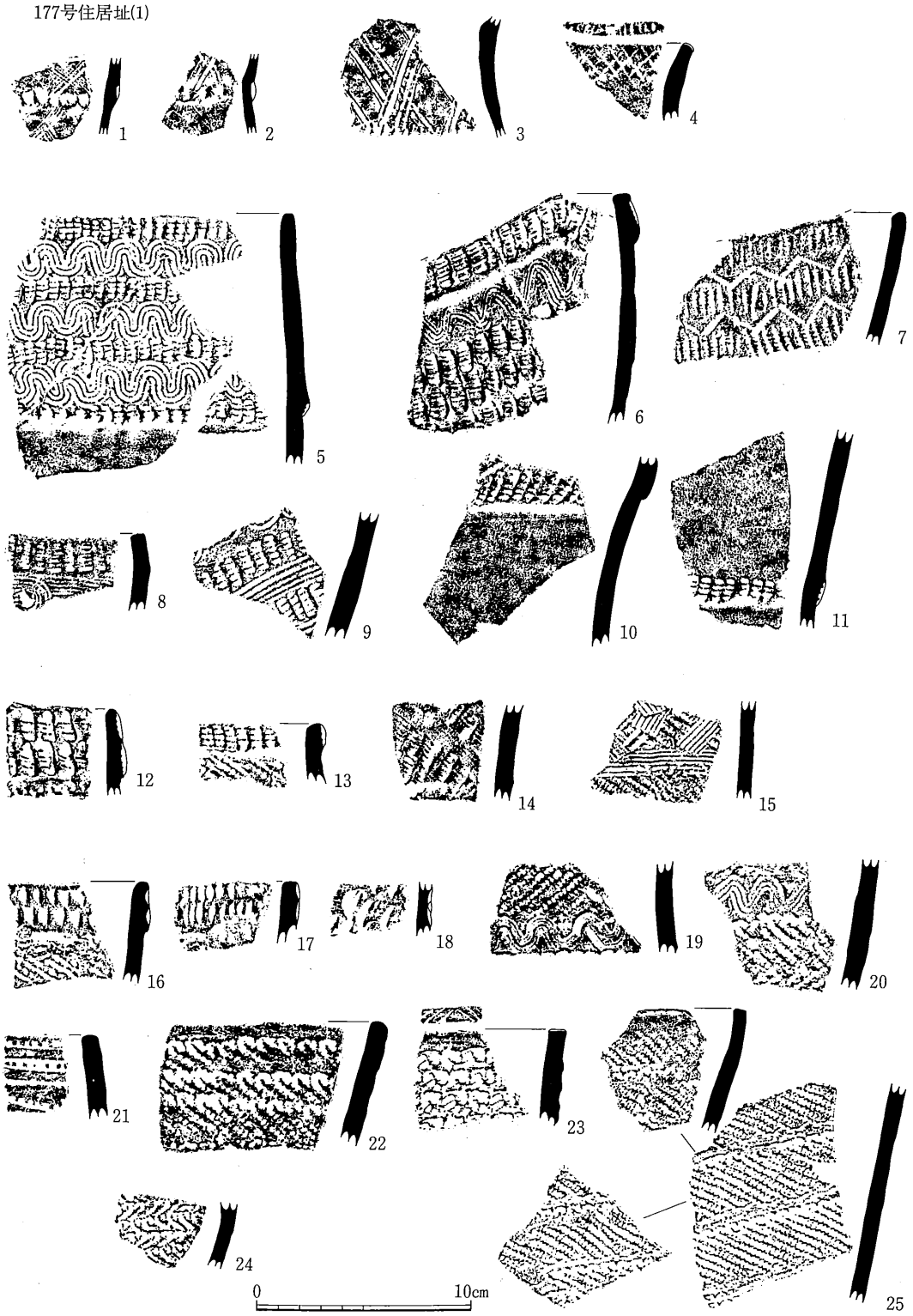


図5　177号住居址出土土器拓影(1)

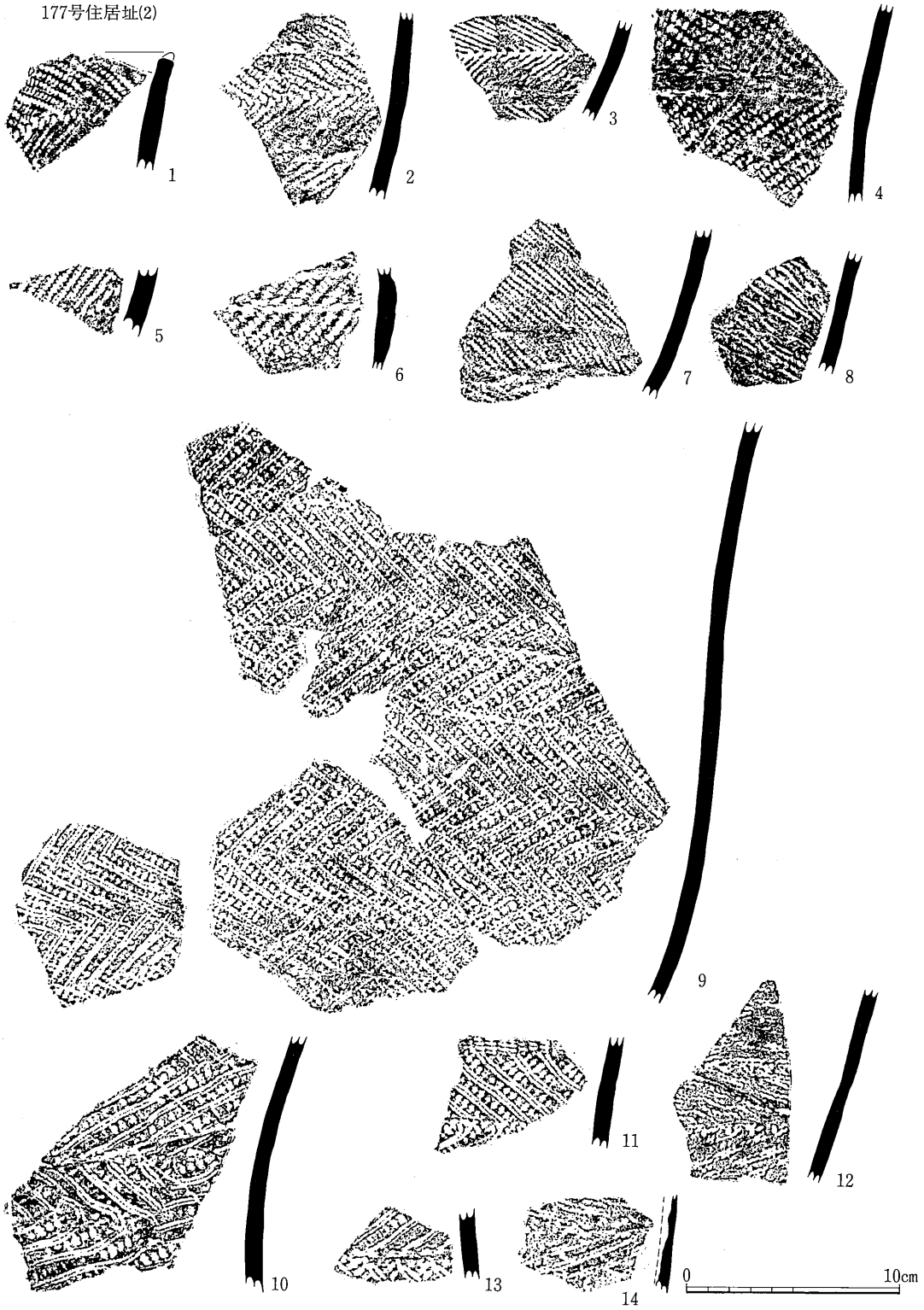


図6　177号住居址出土土器拓影(2)

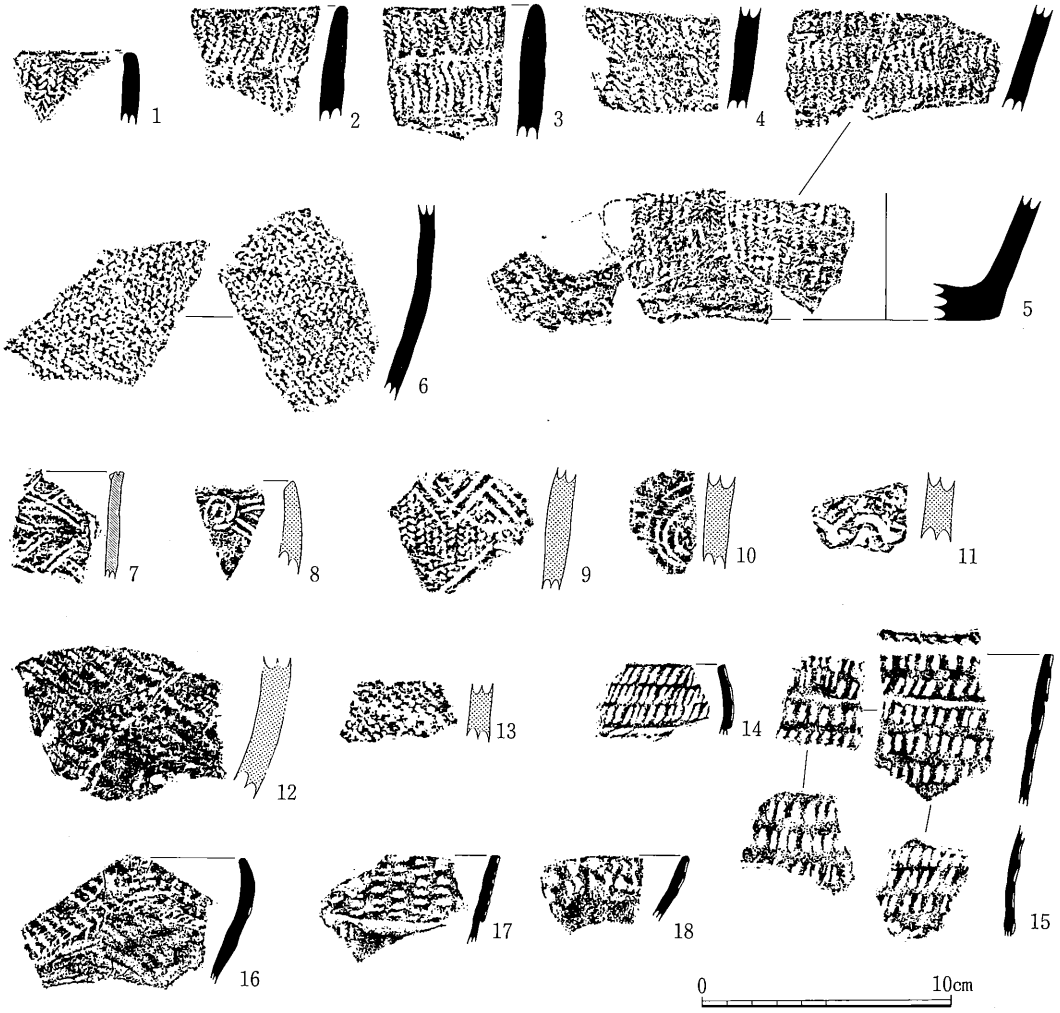


図７　177号住居址出土土器拓影(3)

長方形という推定される住居址の平面形と、主体となる出土遺物から、神ノ木期に所属する住居址である。

(2)　188号住居址

同じくＢＵ－11グリッドに検出された住居址で、南東隅の一部を発掘した(図４)。当初より北まで広げ、既調査部分まで掘り上げる予定であったが、北に、西接する工場への仮設の上水道が埋置されており、そこまでの調査は断念した。図示しなかった既調査部分と合わせると、平面形は、軸線を北からやや西に傾けた7.5m×5.5mの平行四辺形となろう。検出面から床までは深く、

188号住居址

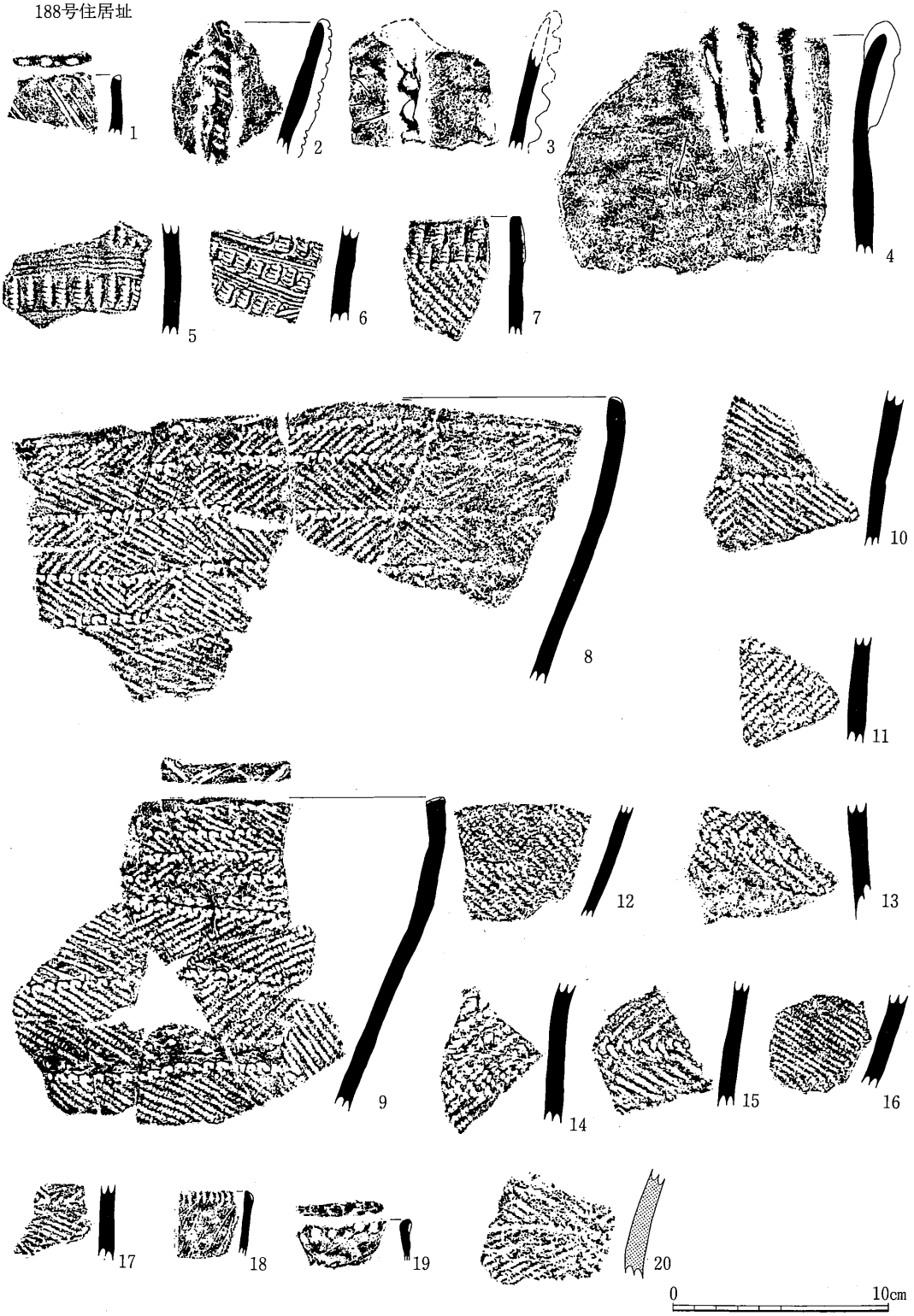


図８　188号住居址出土土器拓影

50cmを測る。埋土下層の床近くには、炭の多く混じる黒色土が観察された。今回調査した部分からは、壁下の周溝と柱穴１本が発見されている。壁に周溝の深さまで達するピット状の窪みや周溝より深いピットP_9があり、上屋に関係した施設であるのかもしれない。

遺物は、埋土が深いこともあって、ごく一部の調査にしては多い。土器のうち、最も多いのがⅠ期Ⅰ群の中でも新しいD、Eの破片で７割、Ⅱ期Ⅰ群が２割、Ⅱ群とⅢ群が１割程度である(図８)。Ⅱ群の口縁直下からループ文を全面に施す８、９は、風化が著しく図化できなかったが８にも口唇に交互に向きを変えた平行する沈線が引かれており、同一個体である可能性もある。石器には、石鏃５、石錐１、スクレパー２、叩石２と、黒曜石の剥片48、屑片24、石核36、両極打法の痕跡のあるもの７、硬砂岩の円礫２があり、石鏃に優品が多い。

土器に中越期の新しいものが多いが、平面形と大破片の出土から神ノ木期の住居址としておきたい。

(3) 282号住居址

ＢＵ11グリッドに、北東を177号住居址に切られる状態で検出されたが、西が道路用地外となるため、調査したのはごく一部である(図４)。平面形や規模は確定できなかった。検出面からの掘り込みは浅く、数cmから10cm程度で、調査時には床面に相当する部分に粘土質黄色土が見つかり、住居址と判断している。周溝はなかったようで、177号住居址内に位置するP_3が、282号住居址の

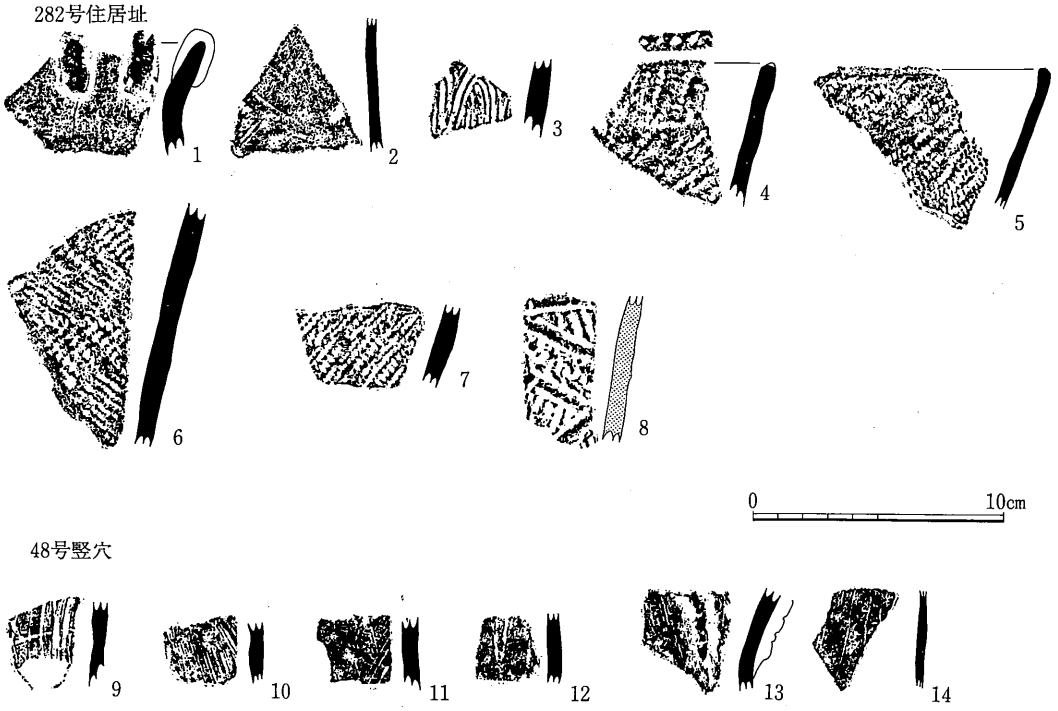


図９　282号住居址、48号竪穴出土土器拓影

柱穴である可能性もあろう。

遺物は少なく、土器はⅠ期Ⅰ群の新しいものが8割近く、小量のⅡ期Ⅰ群が混在している。石器には黒曜石の剝片2、石核2、チャートの剝片2があるだけである。

所属時期は特定できないが、掘り方が浅いことと検出された壁の平面形に丸みが強いことから中越期の住居址の可能性が高い。

(4) 283号住居址

調査区の南端に検出され、北側を48号竪穴によって切られている。北西の一部を発掘しただけで、西接する工場の入口であったため南は調査することができなかった(図10)。従って規模や平面形は特定できてない。壁下を除く床面に、住居址とする根拠となった粘土質黄色土が貼ってあり、周溝はなく、調査範囲にピットはみつかっていない。

遺物はⅠ期Ⅰ群の土器が小量出土しただけであるが、調査時の所見に従えば、本址を切る48号竪穴より古い時期すなわち中越期の古い時期とすることができよう。

2 竪　穴

(1) 48号竪穴

283号住居址の北壁を切るようにして発見された(図10)。平面形は隅丸方形に近く、検出面からその底面までは86cmと深い。埋土は、上層に礫が多量に入った褐色土があり、中層から下は黄色土が少し混じる粘土質黄色土ブロック混入褐色土となっている。検出面での平面形と底面の形態が相似しており、形態に注意して掘られた遺構としていいだろう。ただ、何に使われたかという遺構の性格は、調査区の関係で付近の状況が分からないため、不明とせざるを得ない。

遺物は少ないが、土器は単純でⅠ期Ⅰ群Aで、石器には石匙1、黒曜石の剝片3、屑片1、石核4がある。大

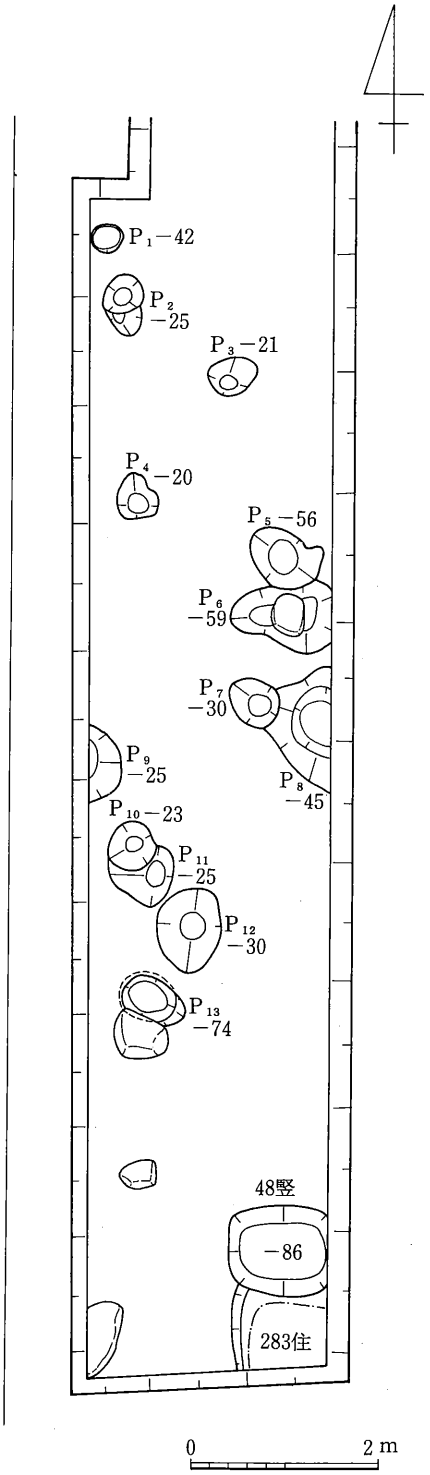


図10　283号住居址、48号竪穴、ピット実測図

型の石匙は埋土最下から出土した。

中越期の古い時期の遺構である。

3　ピット

177号住居址から283号住居址にかけて一帯から幾つかのピットが発見された(図10)。埋土や断面形から、人工的なものとは言い切れないものもあるが、P_1、P_2、P_5、P_6、それに袋状となるP_{13}は、住居址の柱穴と、形態や埋土の状態が極めて似ており、人工的なものとしたい。しかし、柱が建てられていたのかを含め、ピットが掘られた目的や、それらがいくつか集まって何らかの遺構となるのか否かは、調査範囲が狭いこともあって明らかにすることができなかった。

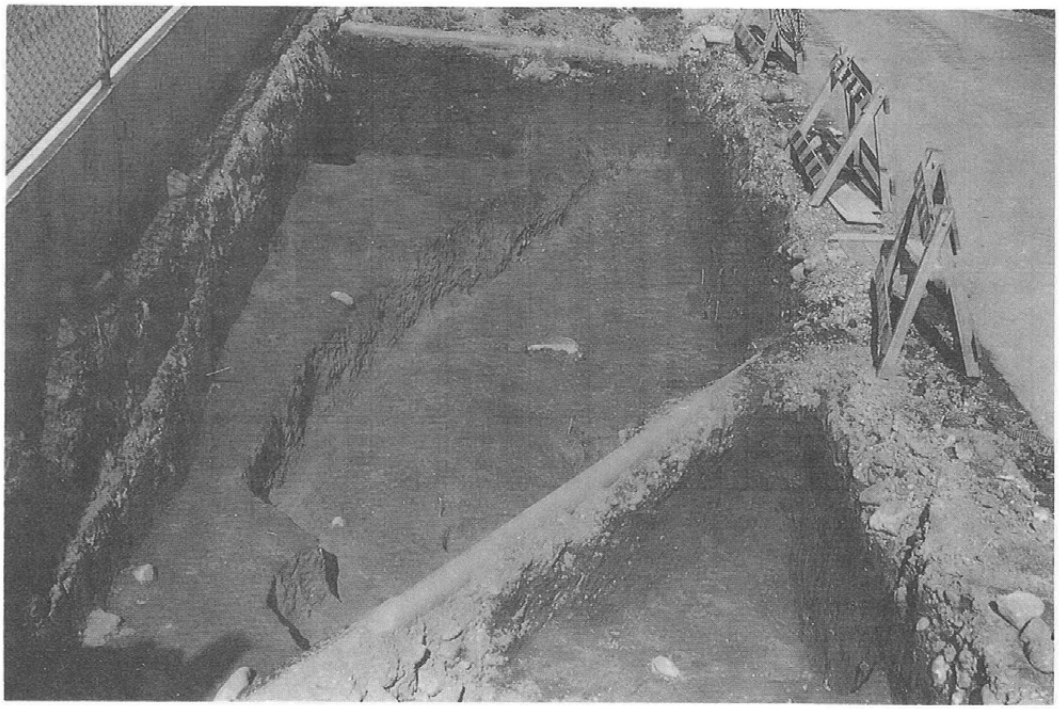
III　まとめ

調査地点は中越遺跡の縄文前期の中の、初頭から中葉までの集落が営まれていた範囲の内であり、しかも、過去の調査によって一部を検出した住居址が、今回調査した範囲に現れることはわかっており、４軒の縄文前期の住居址と１基の竪穴という発見された遺構の数は、予想どおりの数字ということができよう。一部が調査されていた中葉の２軒の住居址は、いずれも今回の調査で平面形や規模を確定することができた。過去にも開発範囲の関係で遺構の一部分しか調査できなかった例があり、これからも発生するであろう小規模な開発に際して、個々の遺構をどれだけ正確に調査し、どの程度精密に当時の集落構造を復元できるか、今後の課題となろう。

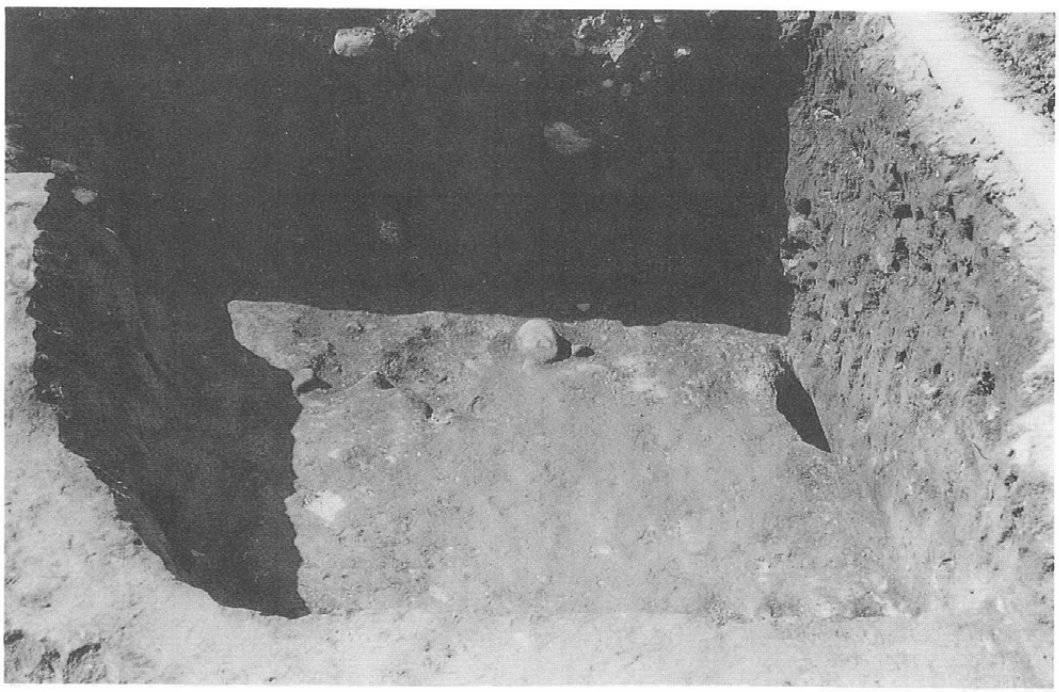
今回の調査でも、中越遺跡の縄文時代前期の遺跡を解明する一つの成果をあげることができた。道路に面した狭い場所の調査で、現場で作業にあたられた皆さんは気苦労もあり大変だったと思う。記して感謝したい。

177、188、282号住居址（北より）

図版2



177、188、282号住居址（南より）



188号住居址（東より）

ピット群の一部（北より）

平成６年度村道拡幅工事に伴う発掘調査報告書②

中 越 遺 跡

1995年３月15日　発行

発　行　宮田村遺跡調査会

印　刷　ほおずき書籍㈱
長野市柳原2133-5